



{連載}  
II }

当財団専門委員  
わたしの一冊

第9回

# 「ローマ人の物語」 塩野七生著 新潮文庫全43巻

公立大学法人・国際教養大学・アジア地域研究連携機構・機構長・教授

熊谷嘉隆

「ローマ人の物語」は歴史小説である。しかし、著者は執筆にあたって一次資料を原文で丹念に調べ、さらに先行研究も綿密に分析した上で、ローマ史を独自解釈を交えながら実に生き生きと一般読者向けに分かりやすく書き上げている。ちなみにこの本を読むきっかけとなったのは、同僚の英国人と雑談した際に彼が言った「ヨーロッパ、特に英国においてローマ史研究はその現代的意義を失うことなく活発に行われているし、義務教育課程でもしっかりと勉強させられる。また、BBCなど不定期にローマ史関連の長編シリーズを作成し、毎回大好評を博している。ヨーロッパ世界を深く理解する上でギリシャ・ローマ史の勉強は絶対必要である。」との一言であった。その言葉に触発されてとりあえず「取っつきやすいローマ史」と定評がある本書を手にしたのが昨年6月で、読み始めると止まらなくなった。紀元前753年にロムルスとその仲間によって建設されたローマ、現在の北アフリカにあったカルタゴの英雄ハンニバルとスキピオ率いるローマ軍とのカンネそして史上最大といわれるザマでの会戦、英雄ユリウス・カエサルが登場とガリア遠征

中の人心掌握における興味尽きないエピソードの数々、ルビコン川を越えた後の元老院そしてポンペイウスとの壮絶な戦い、そして権力掌握と壮大な国家戦略、ブルータスをはじめとする元老院議員による暗殺、クレオパトラとアントニウスの亡国の恋、そして後継者アウグストゥスによる帝政の確立、カリグラ帝による残虐と放縱、五賢帝による統治と陰りの見え始めた帝国運営、キリスト教の国教化、現代に残るローマ街道や水道敷設そして公衆浴場に見られる高度建築技術、北アフリカ、シリア、イギリスに跨がる広大な帝国統治の政治技術と貨幣の流通、などなど、とにかく読み進むにつれ久しぶりに「血湧き肉躍る」高揚感を味わった。また、この本を読んでからヨーロッパ出張の際には時間を見つけてはローマ史関連の史跡を訪ねるようになり、今年3月に英国に出張に行った際には北西部スコットランドとの境界近くにあるハドリアンヌス帝によって作られた北方蛮族侵入防止の防壁を見つめ、二千年近く前の歴史に思いを馳せ感無量。また、これ以降すっかりローマ史にはまり、ローマ史家モムゼン著「ローマの歴史」、ローマ史研究の古典「ローマ帝

国衰亡史」を讀破し、さらにはチャールトン・ヘストン主演「ベンハー」、エリザベステイラー主演「クレオパトラ」、ラッセルクロウ主演「グラディエーター」などローマ史関連の映画を見まくり感動を新たに。今後私のローマ史探訪は暫く続きそう、全く専門の違う「ローマ史」にここまでめり込む事になろうとは思ってもよらなかった。皆さんも如何でしょうか?!



熊谷嘉隆(くまがい よしたか) 1960年生まれ 札幌市出身。公立大学法人国際教養大学アジア地域研究連携機構機構長・教授。1997年モンタ

ナ大学森林学部大学院自然公園管理学専攻修士課程修了、2001年オレゴン州立大学森林学部森林資源学科森林社会学専攻修士課程修了。2002年ワシントン州立大学農業家政学部自然資源科学科博士研究員、2004年から国際教養大学国際教養学部基礎教育社会科学助教授、2007年教授、2015年より現職。国際自然保護連合・世界保護地域委員会副委員長―東アジア地域担当/日本委員会委員長を兼任。主な著作に「グリーン・ツーリズムの活動の展開と地域住民気質の変容―北秋田市阿仁地区の事例から」年報村落研究43号(2008)、「No Need to Reinvent the Wheel: Applying Existing Social Science Theories to Wildfire」In People, Fire and Forests, Oregon State University Press, 2007. など。